

## 蘇えた豊岡のコウノトリ

許斐 喜久子 (このみ きくこ／環境文明21関西グループ)

真っ青な空を2メートルもの大きな翼を上げ、まるでグライダーのように滑空するコウノトリ。ここは兵庫県豊岡市、コウノトリで有名な街です。環境文明21関西グループで「どこかにエコツアーに行きたいね」という話が出た時に、以前からは非訪ねて行きたいと思っていた豊岡に行くことになり、その準備を始めて半年…2012年10月20日やっと本物のコウノトリが飛ぶ姿を見ることができました。

真っ青な空の遙かかなたにまるでゴマ粒のようなものが見え、誰かが「あれかな？」という声に皆が「違うよ、あれはトンビだよ」「いや、コウノトリだ」と勝手にワイワイ。かの鳥は大きな円を描きながら少しずつ少しずつ降りて来ます。

そしてその姿はだんだん大きくなり、白と黒の大きな翼に誰もが「あっ！やっぱりコウノトリだ」と納得した時には12メートルもの高さの巣塔の上に、まるで飛行機の着陸時のように、その細い足を二本揃えて出し大きな翼を羽ばたきながらブレーキをかけてとまるのです。その格好よさ、その大きさ、皆がまるで初恋の人に会ったようにポーッとしています。

今、放たれているコウノトリは約60羽。あとケージの中で飼育されているのは約90羽。総勢150羽ものコウノトリが豊岡を中心に生息していますが、こうなるまでには豊岡の人々の大きな苦勞があったそうです。

コウノトリの郷公園に一枚の写真があります。浅瀬の川の中に牛が2匹、おばあさんが一人、そして餌をついばむコウノトリが10羽…

昭和30年代に当たり前だったこの風景が変わるのにそれほど時間はかかりませんでした。

完全肉食であるコウノトリの食べ物は昆虫、ドジョウ、蛙、鯉、鮎、蛇、そしてうなぎ…。それらの小動物が強い農薬によってどんどん減びると

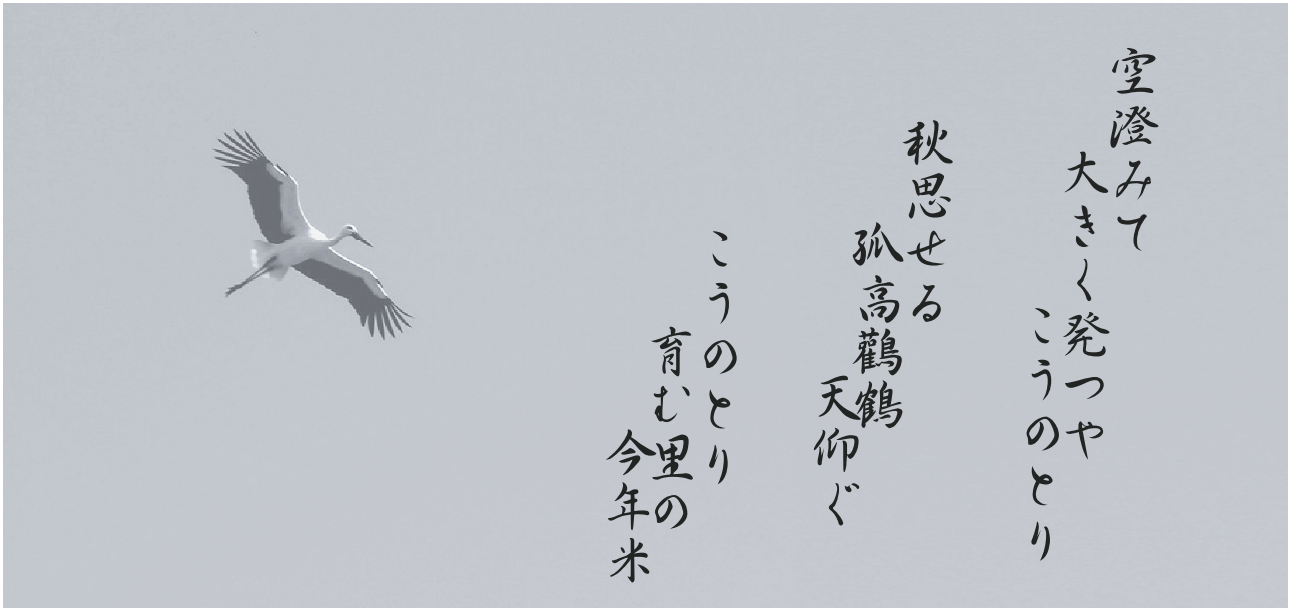
同時にコウノトリも減んでいったのです。

農家の人々の農作業は機械化と農薬散布により、手作業が減り、随分楽になったそうです。しかし皆、心の中で「こんな、動物が全部死んでしまうような薬をかけて、お米は本当に大丈夫か？」という気持ちがあったと、地元農家の稲葉哲郎さんは仰いました。そこでやっぱり自分は農薬を使わないお米を作ろう！と思われ、周囲の方々の「無理だ」という声にもめげずに頑張っただけでした。

害虫を減らすために冬にも田んぼに水をいれ、雑草は手作業で抜かれたとのこと。その努力の甲斐あって田んぼに虫が甦り、魚が戻り、蛙が孵り、そして蛇が増え、食物連鎖の頂点のコウノトリが住める環境が整っていったそうです。そして野生のコウノトリが消えてから43年目の平成19年、野生下でのヒナが初めて誕生したのです。稲葉さんの「自然はまだ回復する力をもっていた」という言葉が印象的で、言葉静かにひとことひとことかみしめるようにお話されるそのお姿に一番感動しました。周囲の言葉に翻弄されず、自分の感性と心の声に素直に反応し、そして自分に正直に生きる、その心がコウノトリを蘇らせるには一番大切なことだと感じました。

コウノトリの繁殖に励む人々、無農薬栽培を頑張る農家、それらを温かく見守り支援する行政と住民…この連携があってこそ初めてコウノトリは大空を飛ぶことができました。そして今、無農薬栽培のお米は「コウノトリの郷のお米」として高い価格で取引されるお米となっています。

環境にいいことが経済にもいい、このような社会ができれば理想だと思います。豊岡のチャレンジは小さな一歩かも知れませんが、これは未来に向かっての大きなチャレンジだと確信した旅でした。



ケージ内で飼育されているコウノトリ。相性の良さがあるようで、つがいにするのも大変だとか。餌もよく食べて、とても健康そう。でも空高く飛ぶには少しダイエットが必要かな・・・。



地元で活動なさっている方々とのワークショップ。有機農法を実践されている農家の方、学校教育に取り入れた校長先生、地場産業に活かす工夫をされている商店主、そしてそれをサポートする行政の方。みなさん、コウノトリと豊岡をこよなく愛している様子でした。

(俳句：大内 善一さん 写真：埋田 基一さん、荒田 鉄二さん)